

補足スライド

『3. 労働と社会』への補足

## [2.5] 効率的運営から社会的運営への移行

“自分”による自分の生命活動の媒介の発展

### 効率的運営から社会的運営へ

- 今度は導き出す。——
- **効率的**運営………**根源的**規定から
- **社会的**運営………**派生的**規定を

### 1. 労働の媒介性

根源のさらにまた根源

### 媒介的な生命活動

決定的に重要なのは、——

- 自分自身で、  
自分自身の行為として、  
自分自身の  
生命活動を媒介するということ。

※ 自然の一部として、  
自然の営みとして、  
生きているだけではなく。

### 二重化

- 自分（＝主体）が  
自分（＝客体）を  
生かしているということ
- ↓ 要するに——
- 自分を二重化しているということ
- そして、この二重化をもたらした媒介的な運動が生産における労働だった。
- ▶ 「[2-B] 労働の媒介性」参照

### 2. 効率的運営と社会的運営

根源的規定から派生的規定へ

## 効率的運営

- 媒介的な生命活動から直接的に（すぐさま）出てくるのは、物質代謝の効率的運営
- この意味では、**社会を形成しないような完全に自給自足のヒッキーも経済活動を行っている。**
  - 現代社会でいうと、家庭内での生産活動も経済活動である。

## 社会的運営

- ⇕ しかしまた、それにもかかわらず、——
- 効率化を達成するためには、個人の能力が制限になる。
  - ↓ したがって、今度は、
  - この効率的運営は、**まさに効率化のために、社会を形成し、社会を利用せざるをえない。**

## 効率的運営の一種としての社会的運営

- ↓ 要するに、
- 社会的運営は
  - 効率的運営の一種
- = すなわち、
- 効率化の手段として、自分自身やまわりの自然だけではなく、社会をも使うようになったのが社会的運営



## 注記

- ここで見ているような自由人の自覚的な社会形成は、
  - 前近代においてはほとんど実現されなかった。前近代においては地縁・血縁に制約された運命的な共同体が前提されていた。
  - 現代においてさえ、その実現は不十分である。
- 「[1.5] どの人類社会にも共通な経済活動を考える意味」参照
- ➡ 「[3-A] 社会と共同体」で詳述

## 社会的運営での媒介性の発展

- こうして、“自分”という目的は——
  1. 自分自身を手段として利用するだけでなく、
  2. 自分の対象である自然を今度は手段として利用するだけでなく、
  3. 他の“自分” (=他の人間) を、したがって社会関係を、手段として利用するようになる。

## 新たな媒介＝手段(1)

- そのことによって、全く新しい事柄が生じる：
  1. 各自の個人的労働が結合して、有機的に一つの労働を、すなわち社会的労働を形成すること
    - この社会的労働という目的にとって、各自の個人的労働は手段になっている。
    - しかしまた、この社会的労働という目的自体が各自にとって自己の労働、自己目的である。
    - 要するに、各自の労働は単なる手段ではなく、やはり自己目的でもある。

### 新たな媒介＝手段(2)

2. そこに含まれる相互的かつ自覚的な関係、すなわち社会的関係

- 人間と自然との関係ならば、相互的な関係にはならない。
- 動物集団ならば、自覚的な関係にはならない。

∴ 以上の理由で、物質代謝の社会的運営という問題は、物質代謝の効率的運営それ自体からは区別して考察されなければならない。

### 例) 社会的運営においてこそ経済が実現

- 経世済民 or 経国済民とは，“世”の中 or “国”，すなわち社会を上手く治めるということ
- 経済システムは，その他の社会的なサブシステムと並ぶ社会的なサブシステムの一つ
- 経済学も社会科学の一つ

### まとめると……

